

連載

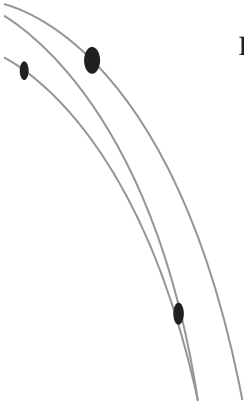
フィールド・アイ

Field Eye

ホノルルから——②

福島大学 長谷川 珠子

Tamako Hasegawa



地上の楽園とストライキ

ハワイの実像

ハワイは「地上の楽園」だといわれることがある。以前来たときは、その通りだと思った。しかし、観光で来るのと住むのとでは、大きな違いがあると、住み始めて早い段階で感じた。

まず、物価の高さが、住人にとっては悩みの種となる。ニューヨークで在外研究中の北海道大学の池田悠君が、昨年のフィールド・アイ(697号104頁)で、物価の高さをボヤいていたが、まさにあのとおりである。ハワイで借りているワンルームの家賃は、福島の1LDKの家賃の3倍もする(福島が安いということもあるが)。外食も非常に高く、普通にランチをするだけで、チップや税を入れると2000円近くにもなる。福島では自炊をほとんどしていなかったが、ハワイでは鍋釜一式買いそろえ、自炊に励んでいる。

次に、ハワイは常夏ではない。昨冬は特に寒かったということだが、12月から3月にかけて寒い日が続いた。もちろん、ダウンコートが必要だとか、そういった寒さではない。東京でいえば10月後半から11月くらいの気温だろうか。問題は、それだけ外が寒くても、室内はエアコンがガンガンに効いている点である。室内にいても、外に出ても寒い。このこともあってか、12月半ばから咳が止まらなくなり、病院に行った。咳止めや抗生物質を飲むも一向に良くならず、3度目の通院の際、専門医を紹介された(保険でカバーされたが病院の紹介だけで費用は170ドル!)。しかし、予約が取れたのは1カ月後。幸い、その間に日本に一時帰国する機会があったので、福島市内の呼吸器

内科に行くと、「咳喘息」と診断された。朝晩、薬を吸引し、7月現在症状は落ち着いている。予約なしで診察をしてくれ、公的医療保険が整備された日本は、なんと素晴らしいのだろうと感じた(その分、それなりの保険料を払っているが)。

第3に、物価の高さとも関係していると思われるが、たくさんホームレスを見かける。バス待ちのときなどに「2ドルくれませんか」と何度か声をかけられた(なぜか、1ドルとか5ドルではなく、2ドルと言われる)。また、凶悪犯罪の発生率は高くないが、窃盗等は日常茶飯事である。ロッカーの鍵が壊されてパソコンを盗まれた、原付を盗まれた、空き巣に入られた等の注意喚起メールが、学内MLでも頻繁に流れてくる。

ロースクールイベントで、「Out of State」という映画を観た。犯罪の増加によりハワイ州内では収容しきれなくなったため、アリゾナに刑務所が作られ、ハワイで罪を犯した人が収監されているという。映画は、刑務所内や出所後の様子を追ったドキュメンタリーである。登場人物の一人は、刑期を終えハワイの家族の元に戻り、一時は幸せを取り戻したかのように見えた。しかし、ジョブセンター(日本でいうハローワーク)に通うも仕事が見つからず、家賃が払えなくなった彼は、映画の最後、海岸でテントを張って暮らしていた。これもハワイの1つの現実なのだ。刑務所の話になったので、ハワイにある女性刑務所(Women's Community Correctional Center)を訪問した際のエピソードについて書いておこう。日本でも刑務所見学をしたことがあるが、中の様子は、日本とはまったく違っていた。みんなリラックスしていて、自由な雰囲気になり過ぎていた。訪問した我々とおしゃべりすることも許されており、ロースクールから来たこと知ると逆にいろんな質問を受けた。所内では、各種宗教、カウンセリング、パソコン等の職業訓練、アート等様々なプログラムが用意され、受刑者は自由に受講することができる。また、刑務作業は義務ではないとのこと驚いた。ただし、することがなくて暇なことと若干の対価(1時間2ドル前後)を得られること、人によっては裁縫等のスキルを身に着けるため、何かしらの作業に従事しているとの説明を受けた。

アロハスピリット

もちろん、ハワイには良いところもたくさんある。何より人が温かい。ご近所の挨拶はもちろん、知らない人であっても、目があえば挨拶をしてくれたりニ

コッと笑いかけてくれたりする。すべての市バスは(建物のほとんど)バリアフリーとなっており、ゆっくり乗降する車いす利用者や高齢者を、誰も急かしはしない。バスが遅れていても文句を言う人はいない。至るところで、お先にどうぞ、という精神がみられる。

人々の言動の基礎となっているのが、「Aloha Spirit」であるといわれる。調べてみると、ハワイ州法 (Hawaii Revised Statutes) 5条7項5にその定義があった。A, L, O, H, A それぞれに意味があり、A (Akahai) は親切, L (Lokahi) は調和, O (Oluolu) は心地よい, H (Haahaa) は謙虚, A (Ahonui) は忍耐を意味する。互いを愛し、尊敬し合い、助け合い、許し合う精神といえるだろうか。自然の豊かさもさることながら、こういった人々の精神がハワイの魅力の一つといえよう。

高級ホテルとストライキ

話を戻そう。ハワイは地上の楽園ではないが、お金持ちにとっては楽園に違いない。だからこそ世界有数の観光地にもなっている。しかし、それが低賃金で働く労働者を苦しめることになる、ということを書きかけたのだが、ずいぶんと脱線してしまった。別荘や投資目的として住宅を購入する人が増え、住宅や家賃の相場が年々高騰しているという(不動産仲介業を営む友人に連れて行ってもらった、ワイキキから西に車で40分程の場所にある、4LDK築約10年の一戸建ての価格は85万ドル!)。これに伴い、物価上昇も著しい。たとえば、市バスの1回運賃は、2003年の1.75ドルから段階的に引上げられ、現在は2.75ドルである。観光が主要産業であるハワイでは、ホテルや飲食店で働く人が多いが、一つの仕事だけでは生活ができず、いくつか仕事を掛け持ちしていると聞く。

そんな実態を、ハワイに来てすぐに目にするようになった。同系列下の5つのホテルの従業員らが、ストライキを起こしたのだ。そのホテルの近くに行った際、太鼓や鐘を鳴らしながら何かを叫ぶ声が聞こえたが、特に気にせずに通り過ぎた。直後に、ローカルニュースでストライキであったことを知り、再度、そのホテルの前を通ったときに、改めて見てみると、「ON STRIKE」や「ONE JOB SHOULD BE ENOUGH」と書かれたプラカードを持った人々が数十人ほどホテル前で声を上げていた。調べてみると、UNITE HEREというカナダとアメリカの、ホテル、ゲーム、フードサービス、製造、繊維、流通、クリー

ニング、輸送、航空の業界で働く労働者27万人を代表する労働組合(同組合のHPより)のハワイ支部(Local 5)に加入する労働者らによるものだった。

部屋の清掃が行われないことや、ホテル内のレストランが利用できないこと、また、ホテル周辺で一日中行われるシュプレヒコールに対し、宿泊客から苦情が出始めた。当初、解決までにそれほど時間はかからないと目されていたようだが、ホテル側が新たに求人広告を出す等の対抗策をとったこともあり、交渉は難航した。2018年10月8日から始まったストライキは、50日以上続き、11月末にようやく終結した。最終的に、4年間で最大約6ドルの賃金引上げ(チップを得られる仕事かどうかで引上げ額に差がある)と医療保険等の福利厚生の実施が合意された。2019年4月に、別の系列のホテルでも従業員らによりストライキが承認されたと報じられたが、その後の労使交渉により、合意に至り、ストライキは回避された。賃上げの他に、雇用保障も合意されたという。

最低賃金引上げの議論

連邦法である公正労働基準法(Fair Labor Standards Act)は、全国一律の最低賃金を1時間7.25ドルと定める(2007年から変わっていない)。ハワイでは、州法によりこれを上回る最低賃金が設定され、2015年1月に7.75ドルとされて以降、毎年75セント引上げられ、2018年1月から10.10ドルとなっている。しかし、ハワイ州は全米でも生活費が高く(ある調査ではホノルルの物価は全米一とも言われる。アメリカはなんでも(ビーチから弁護士まで)ランキングするのが好きらしい)、最低賃金のさらなる引上げは、州議会にとっても最優先事項の1つとされてきた。実際に、今期の州議会では、2020年に最低賃金を12ドルとし毎年1ドル引上げて2023年に15ドルとする改正法案が上院で、また、2020年に10.50ドルとして毎年50セントずつ引上げて2024年に12.50ドルとする改正法案等が下院に提出された。しかし、中小企業の支払い能力を超えとか、雇用数が減るだけだといった反対意見も強く、結局、今期の法改正は頓挫したとの情報を得た。労働者目線では残念だが、住人としてはこれ以上の物価上昇を避けられたことに安堵する気持ちもあり、なかなか複雑である。

はせがわ・たまこ 福島大学行政政策学類准教授。最近の主な著作に、『障害者雇用と合理的配慮——日米の比較法研究』(日本評論社、2018年)。労働法専攻。